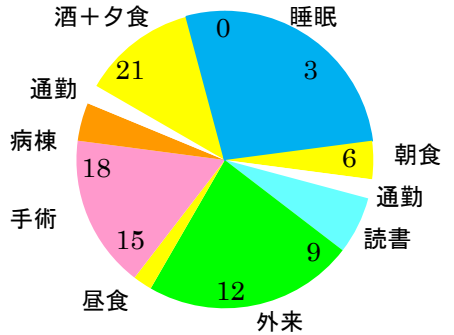




いのちを育む 産婦人科医のお仕事

今月号では皆さまの主治医・産婦人科医がどんな仕事をし、どんな一日を送っているのか取材しました。右は当科のあるドクターの1日です。睡眠時間は6時間半で、年齢とともに早起きになり、5時半には起床します。日テレの「Oha! 4」と新聞を見ながら結構ゆっくりしっかり朝食を摂ります。7時に病院に着きますが、この時間で外科、整形外科、耳鼻科など多くの医師が医局にいます。外来が始まる8時半までメールチェックや読書、文書仕事をしますが、この1時間半をゆったり過ごすことが良い1日につながると考えています。

外来は40人～50人診て14時まで。患者さんの待ち時間を少しでも短くしようと、いつも時間と格闘しています。昼食は「なでしこ」のがつり系の弁当ですが必ず食べます。手術は予定の帝王切開か腹腔鏡手術が大部分ですが、マイペースで行えるので外来よりも楽です。この他体外受精の胚移植などもこの時間に行います。手術後の患者さんや他の入院患者さんを診て、病院を出るのは平均で19時半です。夜は必ず酒を飲むので翌日に疲れが残りません。ビール(サッポロ黒ラベル)が主体です。同級生の弟さんの大越キャスターの「ニュースウォッチ9」や、録画したドラマを見ながら飲みます(最近では「ガラスの家」)。超多忙と言われる産婦人科医ですが、戦場のような外来を除いては、意外にゆったりしています。ポイントはやはり3食をしっかり食べ、また飲むことです。不妊治療で妊娠したり、赤ちゃんが生まれる感動を常々受けることも産婦人科医にパワーを与えてくれます。



分娩、帝王切開

分娩は何といっても産婦人科の1丁目1番地。分娩に立会い、母子双方の状態に気を配ることは、産婦人科医の最大の仕事です。

当院は助産師陣が充実しており、低い医療介入率(会陰切開は初産婦でも20%程度)と高い母乳率を実践しています。ですから実際は「おめでとう」を言うのが産婦人科医の主な仕事です。

もちろん稀に難産の場合には鉗子分娩などを行ったり、生まれた赤ちゃんの状態が悪い場合には新生児蘇生術をし、母体の出血が多いときは、子宮を圧迫したり薬剤を用いたりします。

帝王切開は産科の切り札ですが、夜間緊急に行われることも



手術(内視鏡)

最近では婦人科の手術は、腹腔鏡という内視鏡で行われる場合が大多数です。藤田和之医師(写真左)を中心に県下一の実施件数を誇っています。

1日の手術内容は、予定の帝王切開が1件、子宮筋腫や卵巣嚢腫の腹腔鏡下手術が2件、子宮頸部がんの円錐切除が1件というのが、当院の平均的なところ。当科は月曜日～金曜日まで毎日手術日、昨年手術数は小手術も入れて1000件を超えました。



少なくありません。しかし所要時間はわずか30～40分位です。問題は終わったあとすぐに寝付けられるかどうかです。若い医師は大丈夫ですが、年齢をとると寝付けず、翌日に疲れを持ち越すこともあります。

外来診療

産婦人科は外科系の診療科の中では外来のウェイトが大きい科です。婦人科では、子宮がん検診、子宮筋腫や内膜症の経過観察、婦人科がんの術後フォローなどを行っています。

当院の場合、分娩と体外受精を多く行っているため、産科外来(妊婦健診)と不妊外来の患者数が多いのが特徴です。妊婦健診では毎回エコーを行い、胎児の発育、元気さ、形態異常がないことを確認し、また赤ちゃんの顔などをお見せしています。

不妊外来では、系統的検査を始め、排卵誘発、人工授精、体外受精の卵胞の発育状態を見て、適切な実施時期を決めます。



婦人科がんの治療



湯澤秀夫医師(右)と吉谷徳夫医師が行っているのは、卵巣がんの手術です。卵巣がんの治療は手術に加え化学療法も重要で、より効果的な薬剤の併用や副作用対策を行います。

子宮体がんも手術が基本ですが若年者で挙児希望のある場合、ホルモン療法を行うこともあります。

子宮頸がんは初期のケースが多く、円錐切除を多数行っています。

生殖補助医療



産婦人科医の専門は、周産期医療、婦人科腫瘍それに生殖医療の3つに大別されます。生殖医療では体外受精、顕微授精、凍結胚移植などの生殖補助医療(ART)が重要になります。

実際に卵子、精子、胚を日々取り扱うのは胚培養士という専門職で、当院には新大農学部大学院卒の2名が勤務しています。

培養士に培養の方針などの指示を出したり、採卵、胚移植など患者さんに接するのは産婦人科医の仕事です。特殊なケースなどでは、写真のように直接ラボ・ワークを行う場合もあります。